

## 2000年の日本の天候

### (1) 2000年の天候の特徴

- ・北日本・東日本・西日本の5月以降の高温傾向  
南西諸島では平年並傾向(2~9月)(図-1)
- ・冬平均気温は北暖・西並傾向  
全国的に高温は1月のみ
- ・北陸で少雪、西日本の日本海側で多雪
- ・春の気温は平年並、東日本では高温
- ・梅雨期間の少雨(東日本の一部と西日本)
- ・北・東日本の夏の顕著な高温
- ・秋の高温と不順な天候
- ・台風の上陸なし

全般的には高温傾向で経過したが、各地とも気温が平年並の時期があった。北日本・東日本・西日本では4月までは平年並の月が多く、5月以降は高温傾向が顕著だった。南西諸島では、2月から9月までの半年以上にわたって平年並の傾向が続き、10月以降に高温に変わった。

春は北日本で多雨と寡照が目立った。7月に梅雨前線が不活発で8月も晴れて気温の高い日が多かったため、北陸、東海、西日本では夏に少雨・多照となった。秋は低気圧や前線の影響を受けやすくほぼ全国的に多雨・寡照となった。南西諸島では5月に著しい少雨・多照となったほかは多雨・寡照の月が多かった。

### (2) 年平均気温・降水量・日照時間(12月14日までの暫定値)

年平均気温は全国的に平年を上回り、東日本を中心に北海道南部から九州北部にかけての広い範囲で平年より1以上高い地点があった。全国平均(15地点)の年平均気温平年差は+0.74(12月14日までの暫定値)で、1898年以降では第5位の高温だった。年降水量は西日本を中心に少なく、北陸や瀬戸内海沿岸部では平年の80%未満のところがあった。一方、北海道から関東にかけてと、九州南部から沖縄にかけては多く、平年の120%を越えたところがあった。年日照時間は東日本と西日本では平年を上回り、関東や九州北部などでは平年の110%を越えたところがあった。一方、北日本と南西諸

島では平年を下回り、北日本の日本海側では平年の90%未満のところが多かった。(図 - 2)(表 - 1)

### (3) 冬(1999年12月~2000年2月)

- \* 北日本と東日本は「高温」、西日本と南西諸島は「平年並」
- \* 東・西日本の太平洋側で少雨
- \* 南西諸島は多雨・寡照
- \* 日本海側の降雪量は、北陸で少雪、西日本の日本海側で多雪

各月の後半には冬型の気圧配置となり気温が下がったが、1月にはアリューシャン低気圧が発達せず全国的に著しい高温となった。このため、冬平均気温はほぼ全国的に平年を上回り、北日本と東日本では「高温」となった。西日本と南西諸島では「平年並」の範囲だった。

降水量は、北日本と南西諸島で多く、東日本と西日本では少なかった。特に東・西日本の太平洋側では、頻繁に低気圧の影響を受けた1月を除き降水量が少なく、平年の80%未満のところが多かった。また関東甲信では平年の半分以下のところがあった(前橋: 平年比23%、熊谷: 同31%など)。南西諸島では期間を通して低気圧や前線の影響を受けやすく、降水量が多く日照時間が少なかった。

日本海側の降雪量は、北日本の日本海側では平年並、気温の高かった1月に降雪量が少なかった北陸では冬3か月間の降雪量も少なかった。寒気がしばしば西日本方面に南下したため近畿日本海側から山陰にかけての降雪量は多かった。冬3か月間の降雪量は、北海道日本海側が平年の107%、東北日本海側が93%、北陸が54%、近畿日本海側が132%、山陰が133%だった。

### (4) 春(3~5月)

- \* 気温は「平年並」、東日本では「高温」
- \* 北日本では多雨・寡照、西日本では少雨・多照
- \* 南西諸島では3,4月の多雨・寡照から5月の少雨・多照へ変化
- \* 東日本を中心に降雹や突風が多発

気温は、3,4月はほぼ全国的に平年並で経過したが、5月は南西諸島で平年並だったほかは高くなった。このため、5月の高温が明瞭だった東日本を除き春平均気温は平年並となった。

北日本や東日本日本海側では、春を通して低気圧や前線の影響を受けやすく、曇りや雨又は雪の日が多かった。一方、東日本太平洋側や西日本では移動性高気圧に覆われ晴れる日が多かった。南西諸島では、3月から4月にかけては低気圧や前線の影響

を受けやすかったが、5月になると一転して移動性高気圧に覆われて晴れる日が多く、梅雨入りが平年より1週間から10日程度遅く、5月半ば以降になった。春3か月間の降水量は、北日本ではかなり多く、西日本や南西諸島では少なかった。日照時間は北日本や東日本日本海側ではかなり少なく、東日本太平洋側や西日本ではかなり多かった。また、4月後半から5月にかけては、しばしば上空に寒気が流入し大気の状態が不安定になり、東日本を中心に降雹や突風などによる被害が発生した。

### (5) 夏(6~8月)

- \* 北日本、東日本、西日本の高温
- \* 北陸、東海、西日本の少雨(7月に梅雨不活発)
- \* 上空に寒気が流入し雷雨、雷が多発
- \* 南西諸島の寡照

梅雨入りは、九州では平年より1週間以上早く、梅雨前線の北上が遅れた東北北部では10日近く遅れたがそのほかの地方ではほぼ平年並だった。梅雨前半の6月は、梅雨前線の影響で曇りや雨の続く時期があり、前線の活動はほぼ平年並だった。7月は、太平洋高気圧の日本の南海上への張り出しが弱く、梅雨前線の活動が不活発となり、北陸、東海および西日本では月降水量がかなり少なかった。一方、日本の東海上を北上した台風第3号の影響を受けた北・東日本の太平洋側では降水量が多かった。梅雨明けの時期は、南西諸島では6月下旬前半で平年よりやや早かったが、九州から東北南部は7月中旬、東北北部は7月下旬でほぼ平年並だった。梅雨期間に相当する6~7月の降水量は、7月の降水量が少なかった東日本の一部と西日本ではかなり少なかった。特に、近畿地方日本海側~中国地方では平年の半分以下のところが多かった。一方、7月上旬に台風第3号の影響を受け、また大規模な雷雨のあった関東地方などでは多かった。寒気の南下をもたらすオホーツク海高気圧の発達に梅雨期間にほとんどなく、また梅雨の後半に梅雨前線の活動が弱く晴れて気温の高い日が多かったことなどから、6~7月は高温で経過した。

梅雨明け後の盛夏期は概ね太平洋高気圧に覆われ晴れて暑い日が多く、各地で「高温に関する気象情報」が発表された。しかし、太平洋高気圧の勢力が安定せず、上空への寒気の流入や太平洋高気圧の周辺を回る暖かく湿った気流の影響でにわか雨や雷雨が頻発した。関東甲信や東北南部では7~8月の雷日数が平年を大きく上回った(山形19日(平年6日)、宇都宮24日(同10日)、東京9日(同5日)など)。

南西諸島では、7~8月に台風など熱帯低気圧や太平洋高気圧の周辺を回る暖かく湿った気流の影響を受けやすく、平年に比べて曇りや雨の日が多かった。

夏平均気温は、南西諸島で平年並だったほかは高く、特に北日本や東日本の高温が顕著だった。夏3か月間の降水量は、梅雨期間の降水量が少なかった北陸、東海および西日本を中心にかなり少なかった。一部では取水制限が実施され、「少雨に関する気象情報」が頻発された。一方、低気圧の通過が多かった北日本日本海側、台風第3号や雷雨の影響を受けた関東、梅雨前線や温暖で湿った気流の流入しやすかった九州

南部、熱帯擾乱の影響を多く受けた南西諸島で降水量が平年を上回った。

## (6) 秋(9~11月)

- ・全国的に高温・多雨・寡照
- ・全国的に多雨・寡照(低気圧や前線の影響で天候不順)

全国的に気温が高く、東海から九州にかけては平年より1.5以上高いところがあった。東日本・西日本は季節を通して気温の高い状態が続いたが、北日本では10月後半からは寒気が南下しやすくなり、気温が平年を下回るようになった。特に、11月には強い寒気が南下し、北海道では大雪となり気温が低くなった。一方、南西諸島では、9月は台風など熱帯低気圧の影響を受け、曇りや雨の日が多く気温が低かったが、10月~11月には一転して気温がかなり高くなった。

9月は、北日本で低気圧や前線の影響を受けやすく、曇りや雨の日が多かった。10月~11月は日本の南に位置する太平洋高気圧の勢力が平年より強かったことなどにより、日本の南岸に前線が停滞しやすく、また移動性高気圧が北に偏って通過することが多かったため、東日本の太平洋側、西日本、南西諸島では平年に比べ曇りや雨の日が多かった。

3か月間の降水量は、9月の秋雨前線および台風14号の影響による大雨(東海地方を中心に大きな被害)、あるいは10月から11月にかけて低気圧や前線の影響を受けやすかったことなどにより、北日本で平年並だったほかはほぼ全国的に多かった。特に、東海、近畿、甲信地方などでは平年の1.5倍を越えたところがあった。日照時間は全国的に少なく、特に北日本の日本海側(低気圧の影響を受けやすく、11月には冬型の気圧配置がしばしば現れた)や西日本の太平洋側では平年の90%を下回った。11月下旬以降は、これまで前線や低気圧の影響で平年に比べて曇りや雨の日の多かった東日本・西日本の太平洋側や南西諸島でも晴れる日が多くなった。

## (7) 台風

今年の発生数は22個(12月14日現在)で平年の年間発生数27.8個よりは少なかった。上陸した台風はなく、これは1986年以来である。しかし、日本本土に接近した台風は5個(平年5.3個)で平年並、南西諸島に接近した台風は10個(7.5個)で平年より多く、台風の影響は必ずしも小さくはなかった。たとえば、7月上旬に日本の東海上を北上した台風第3号による関東から東北の太平洋側にかけての大雨被害、あるいは南西諸島を通過した台風第14号と秋雨前線による東海地方を中心とする大雨被害などが顕著だった。

表 - 1 年平均気温、年降水量、年日照時間の地域平均平年差（比）  
 (2000年1月1日～12月14日)

2000年1月1日～12月14日  
 平年値は日平滑年値を使用

		気温	降水量	日照時間					
北海道	全域	0.5℃	113%	90%	北海道	全域	0.5℃	113%	90%
	日本海側	0.6℃	115%	85%		日本海側	0.6℃	115%	85%
	オホーツク太平洋側	0.3℃	114%	91%		オホーツク太平洋側	0.3℃	114%	91%
東北	全域	0.6℃	109%	97%	東北	全域	0.9℃	102%	94%
	日本海側	0.9℃	98%	91%		日本海側	0.9℃	98%	91%
	太平洋側	0.8℃	106%	95%		太平洋側	0.8℃	106%	95%
関東甲信	北陸	0.8℃	103%	90%	関東甲信	北陸	0.9℃	102%	97%
	山陰	0.9℃	102%	97%		山陰	1.0℃	104%	106%
	山陽	1.0℃	104%	106%		山陽	1.0℃	83%	104%
北東近畿	北陸	0.9℃	94%	105%	北東近畿	北陸	0.9℃	94%	105%
	海畿	0.8℃	91%	103%		海畿	0.8℃	91%	103%
	全	0.8℃	95%	101%		全	0.8℃	95%	101%
中国	日本海側	0.8℃	89%	103%	中国	日本海側	0.8℃	89%	103%
	太平洋側	0.8℃	84%	101%		太平洋側	0.8℃	84%	101%
	全	0.8℃	90%	101%		全	0.8℃	90%	101%
四国	山陰	0.9℃	76%	101%	四国	山陰	0.9℃	76%	101%
	陽	0.8℃	90%	103%		陽	0.8℃	90%	103%
	全	0.8℃	90%	103%		全	0.8℃	90%	103%
九州北部	山陰	0.8℃	88%	108%	九州北部	山陰	0.8℃	88%	108%
	陽	0.5℃	103%	98%		陽	0.5℃	103%	98%
	全	0.7℃	105%	99%		全	0.7℃	105%	99%
九州南部	九州南部	0.1℃	97%	90%	九州南部	九州南部	0.1℃	97%	90%
	奄美	0.5℃	115%	90%		奄美	0.5℃	115%	90%
	全	0.5℃	115%	90%		全	0.5℃	115%	90%
沖繩	全	0.5℃	115%	90%	沖繩	全	0.5℃	115%	90%

表 - 2 月平均気温、月降水量、月日照時間の記録更新地点があった主な地域

(2000年)

	高温	低温	多雨	少雨	多照	寡照
1月	東北					
2月				関東甲信、九州	北海道、関東甲信	南西諸島
3月			北日本		関東甲信、西日本	東北
4月			北日本、南西諸島			
5月	北海道		北海道	九州南部、南西諸島		
6月						
7月				西日本		
8月		南西諸島		東北、北陸		
9月						
10月						九州
11月	東日本、西日本 南西諸島		西日本			西日本

図 - 1 地域平均気温平年差の5日移動平均時系列

2000年 1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月

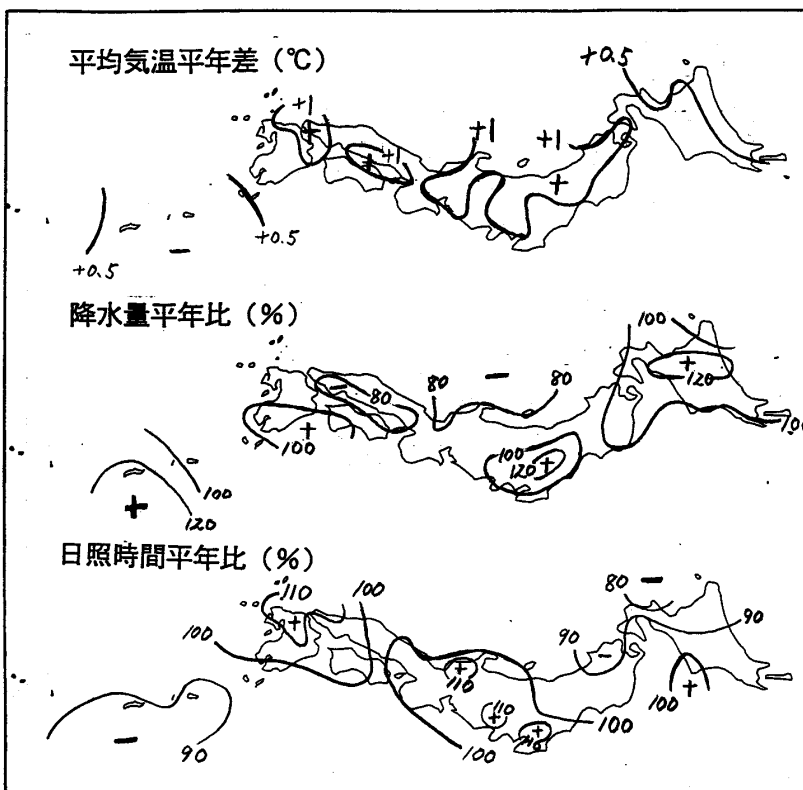
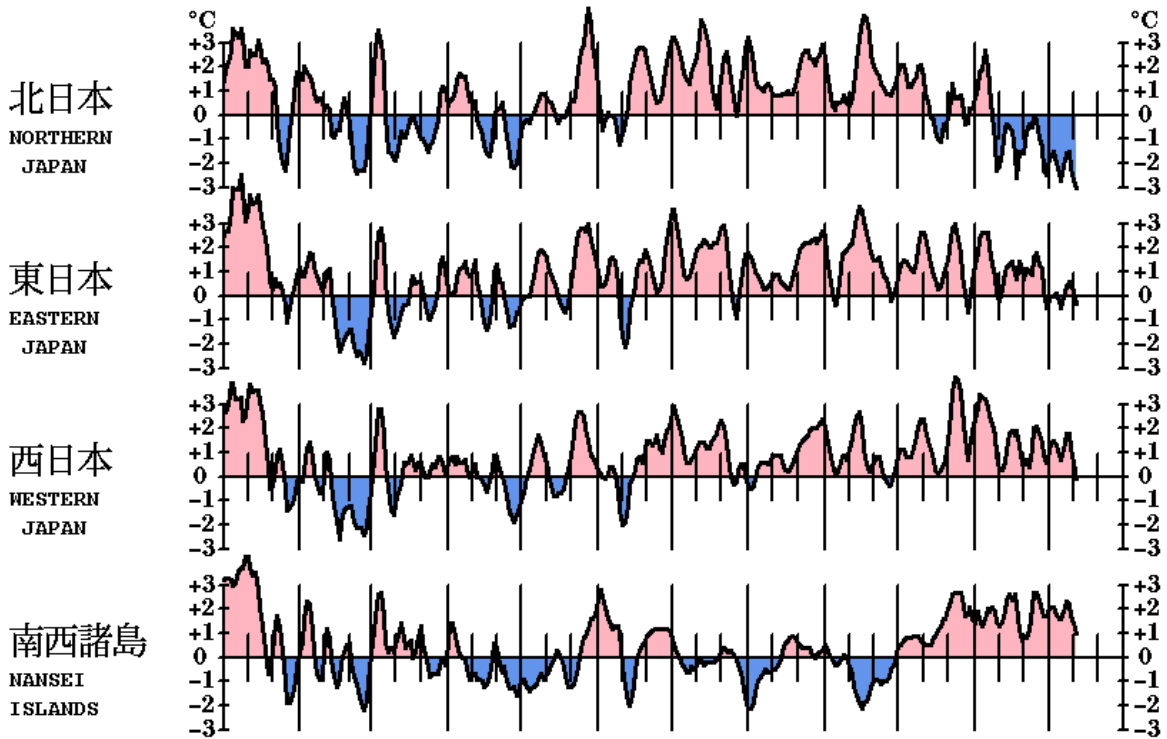


図 - 2  
年平均気温、年降水量、  
年日照時間の平年差 (比)  
分布図  
(2000年1月1日 ~ 12月14日)